

# 所有構文の定性効果について\*

## The Definiteness Effect in Possessive Constructions

小深田 祐 子

### 1. はじめに

定性効果という現象は、不定名詞句だけが要求されるような現象を指す。

(1) a. There is a candidate for the job.

b. \*There are the candidates for the job.

(1a)では、there構文のbe動詞に後続する名詞句が不定で容認されるが、(1b)のように定名詞句が後続すると容認されない。

There構文の定性効果に関しては、統語的、意味的、語用論的観点からさまざまな議論がなされているものの、英語の所有構文の定性効果に関する研究は、there構文ほどさかんに論じられてきたわけではない。<sup>1</sup>

本論では、日英語の所有構文とそれに関連する構文に見られる定性効果について、意味・語用論的な観点から論じる。とりわけ、定性効果と譲渡不可能所有という概念との関係について考察をおこなう。その上で、西山(2003, 2009, 2013)の日本語の分析を取り上げ、本論の主張との関連をさぐる。特に、名詞句の意味機能(指示的名詞句、叙述名詞句、変項名詞句、(非)飽和名詞など)の観点から、英語の所有構文がどのように位置づけられるかを考える。

### 2. 定性効果と譲渡不可能所有

#### 2.1 英語の所有構文

本論で取り上げる所有構文とは、(2)のようなhaveを含む構文を指すものとする

る。

(2) a. John has a sister.

b. \*John has the sister.

(2a)では、haveの目的語は、不定名詞句が用いられ容認される。一方、(2b)のように、定名詞句の場合では容認されず、定性効果が生じる。

これまでの研究では、所有構文の定性効果を所有関係が譲渡可能か否かという観点から説明している。すなわち、所有構文に定性効果が生じるのは、親族関係や、身体部分を表わすような、関係概念を表わす名詞(関係名詞)が目的語に用いられる場合であるとされてきた。親族関係や身体部分というものは、他人に譲渡できないものであるために譲渡不可能所有と呼ばれる。<sup>2</sup>譲渡不可能所有という概念こそが、所有構文に定性効果を生じさせる原因だとされている。

(3) 所有構文の定性効果の説明(先行研究)：

譲渡不可能所有(親族関係、身体部分など)を表わすような関係名詞  
(relational noun)が目的語に用いられる場合

(de Jong (1987), Keenan (1987), Partee (1999)など)

一方、譲渡不可能所有という概念の対となる、譲渡可能所有が表わされる場合には、その効果は出ないように思われる。

(4) a. John has a book.

b. John has the book.

(4)において、haveの目的語名詞のbookは、親族関係や身体部位などとは異なり、明らかに他人に譲渡することが可能である。つまり、bookは、譲渡可能所有を表わす非関係名詞として理解される。このような名詞がhaveの目的語として用いられると、(4b)のように、定表現となっても容認される。

したがって、一見すると、所有構文の定性効果の有無は、譲渡可能所有か不可能所有かという概念の違いによって説明できているように思われる。

しかしながら、それだけでは説明できない例がある。

(5) Q. What will you give to Eliza for her birthday?

A. Eliza has {a/\*the} mirror, so I won't give one to her.

(5)において、Elizaに、何をあげるかを問われて、(5A)では、「Elizaは鏡を持っているから、それはあげないようにする」と返答している。(5A)の文には、haveの目的語として譲渡可能所有を表わす非関係名詞が用いられているが、不定表現のみしか許されない。すなわち、譲渡可能所有が表わされる場合で定性効果が生じていることになる。

それに対して、譲渡不可能所有を表わす名詞が用いられた場合でも、定性効果が見られない場合もある。

(6) John has the sister as a dance-partner.

(6)における目的語は、譲渡不可能所有を表わすsisterであるが、定表現として表わすことが可能である。

以上のことを考慮すると、目的語名詞の表わす所有関係が譲渡可能であるかどうかという区別によって、定性効果を適切に説明することができないといえる。つまり、目的語名詞句だけに着目しているだけでは、定性効果の有無を説明できないことになる。

## 2.2 日本語の所有構文

英語の所有構文と同じことは、日本語にも当てはまる。

(7) a. 彼女には、弟がいる。

b. \*彼女には、{その/あらゆる/ほとんどの/すべての}弟がいる。

(cf. Muromatsu (1996), Kishimoto (2000), 岸本(2005))

岸本(2000, 2005)によると、日本語の所有構文では、「に」格名詞が主語として、また「が」格名詞が目的語として機能するとされる。(7)の目的語には、譲渡不可能所有に分類される親族関係をあらわす名詞が用いられている。(7b)からわかるように、目的語名詞句に、定名詞句および強決定詞(strong determiner)に分類される決定詞は現れることはできない。

それに対して、(8)のように譲渡可能所有をあらわす名詞が用いられる場合に

は、定性効果が生じないように思われる。

(8) ジョンにはあの本がある。

以上のような例に基づけば、これまでの先行研究の見解通り、定性効果を説明するには、目的語名詞句のあらわす譲渡不可能所有という概念が重要になると考えられる。しかしながら、日本語の所有構文に関してもそれだけでは説明できない例がある。

(9) ジョンにはメアリーの弟がいる。

(10) a. 彼女には、{たくさんの/いくらかの}お金がある。

b. \*彼女には、{その/あらゆる/ほとんどの/すべての/彼女の}お金がある。

(9)では、目的語は関係名詞であるが、問題なく容認される。また、(10)では目的語に非関係名詞が用いられているが、定冠詞を含む強決定詞(strong determiner)とは共起することができずに、定性効果が生じる。

したがって、目的語名詞の表わす所有関係が譲渡可能であるかどうかという区別自体が、日英語の所有構文の定性効果を説明する上で、それほど重要ではないといえる。もっと言うと、目的語名詞にのみ着目しているだけでは、定性効果が生じるかどうかは分からないということになる。

本論では、日英語の所有構文の定性効果を統一的に説明するために、構文全体で表わされる解釈を考慮する必要があると主張する。具体的には、「所有解釈」と「所持解釈」という二つの解釈を提案する。その上で、西山(2003, 2009, 2013)の日本語についての分析を紹介し、本論における主張との関連をさぐる。

### 3. 構文の解釈と定性効果

#### 3.1 所有解釈

(11) a. John has a wife (of his own). 【妻帯者】

b. wife:  $\alpha$  の妻

(11a)の目的語名詞句は譲渡不可能所有を表わす。修飾句of his ownが用いられて

いることから分かるように、(11a)はジョンが妻帯者であることを述べている。つまり、ジョンの内在的な特性もしくは属性を述べる文である。関係名詞である wife は、「 $\alpha$  の妻」の  $\alpha$  の値が決まらなければ、ある人が妻であるかどうかを決めることはできない。ジョンの妻となってはじめて完全な名詞句として成立する。このように、主語の特性や属性を述べる場合の解釈を「所有解釈」と呼ぶことにする。

同様に、以下の日本語の所有構文も所有解釈を得ると考えられる。

(12) 太郎には兄弟が{ある/いる}。

(12)は、主語の太郎の家族についての記述であり、太郎の内在的な特性を表わしていると考えられる。

ここで気を付けなければいけないのは、所有解釈は、目的語に関係名詞をとる場合だけでなく、譲渡可能所有を表わす非関係名詞が用いられる場合にも得られるという点である。

(13) a. Eliza has a car. 【車持ち】

b. Eliza {owns/possesses} a car.

(13a)において、目的語名詞は、譲渡可能所有を表わす名詞である。(13a)が(13b)と同義である場合、(13a)は、Elizaが「車持ち」であるという彼女の特性を表わす文であると理解できる。同じことは、(14)の日本語の構文にも当てはまる。(14)は目的語に譲渡可能所有をあらわす名詞が用いられており、「車持ち」、「金持ち」という主語の特性が表わされると考えられる。

(14) ジョンには{車/お金}がある。 【車持ち/金持ち】

よって、「所有解釈」とは、目的語名詞に譲渡不可能所有に加え、譲渡可能所有を表わす名詞が用いられる場合にも得られる解釈だといえる。

### 3.2 所持解釈

(15) Q. What can I use to hold these papers down?

A. Eliza has a mirror.

(A'.# Eliza {owns/possesses} a mirror.)

(Tham (2006: 142))

(15)の対話において、(15A)の目的語には、譲渡可能所有を表わす名詞mirrorが用いられている。(15Q)は、何か紙を押さえておくものがないかを探している文である。その返答である(15A)は、Elizaが実際にその鏡の法的な所有者(legal owner)であるというような、彼女の内在的な属性を表わす文だと解釈しなければならない状況ではない。つまり、(15A)は、単にElizaが誰かに借りた鏡を所持しているだけという解釈も可能である。もしそうでなければ、(15A')のように、主語に所有者を要求するような動詞、own, possessを用いて返答してもよいはずである。しかしながら、この文脈では、own, possessで返答することはできない。このような差は、(16)における容認度の違いからも確認できる。

(16) a. Eliza has a mirror, but it doesn't belong to her.

b. # Eliza {owns/possesses} a mirror, but it doesn't belong to her.

(16a)では、「Elizaが目的語の鏡を自分の意のままに利用可能であるが、その鏡の所有者ではない」ということが表わされている。それに対して、(16b)のような、必ず主語に所有者を要求する動詞が用いられる場合には、後続の節において、そのownershipをキャンセルすることはできない。このように「主語が目的語を、自由に利用したり、活用できる状況にあるが、主語が目的語の所有者ではない」という解釈を、「所持解釈」と呼ぶことにする。所持解釈は、(16a)のように、典型的には、物理的なモノを所持する場合に得られる解釈だと思われるが、ここでは、より抽象的な意味での所持を表わすと考える。つまり、モノだけでなく、有性のヒトを目的語にとる場合にも得られる解釈だと考える。たとえば、(17)の例がその一例である。

(17) Paul: I have a brother of Jack's as secretary.

Kim: Oh, that's funny! Anne has a sister.

(Jensen and Vikner (1996: 8))

(17)の対話において、haveの目的語は、譲渡不可能所有を表わすbrotherおよびsisterが用いられており、ヒトが目的語に用いられている。Paulが「僕はJackの弟を秘書に雇っている」と発言したのに対し、Kimは「おもしろいね。Anneの秘書はJackの妹だよ」と答えている。Kimの発言は、Anneに妹がいるという、Anneの血縁関係を述べているのではない。この場合は、Anne以外の第三者の妹が彼女の秘書であるという解釈となる。つまり、Anneと第三者の妹とは、秘書という関係において一時的に関係を結んでいるだけである。したがって、次のような文が問題なく容認される。

(18) Ann has a sister as her secretary, but she doesn't have a sister of her own.

(18)の前件の文では、Annと目的語sisterとの関係は、姉妹関係ではなく、as句で表現される秘書としての関係である。よって、後続のbut節で、Ann自身には妹がないと矛盾なく続けられる。このように、所持解釈は、主語と目的語との間に、ある文脈によって指定された関係が存在する場合に得られる。

以上のことから、所持解釈は、モノ、ヒトに関係なく、さらに、譲渡可能所有、譲渡不可能所有のどちらを表わす名詞が用いられても得られる解釈だといえる。

さらに、英語に限らず、日本語の所有構文においても得られる解釈である。

(19) ジョンにはあの本がある。 (= (8))

(19)の目的語は譲渡可能所有を表わす名詞である。(19)で伝えようとしているのは、主語のジョンがその本の所有者だということではない。ここで注意しておきたいのは、「あの本」の所有者は、ジョン以外の人間である可能性もあるが、ジョン自身であってもいいという点である。ただし、そうであったとしても、所持解釈を得る文は、主語が「あの本」の所有者だと述べる文ではない。例えば、「あの本があるおかげで、ジョンが勇気づけられている」というような解釈が可能である。つまり、所持解釈の得られる文というのは、実際は主語がその対象物を所

有していたとしても、主語の所有物であることを伝える文ではない。あくまで主語と目的語との間にある、語用論的に指定された関係を述べるにすぎない。

さらに、所持解釈は、譲渡不可能所有をあらわす名詞が用いられた場合にも得られる。

(20) ジョンにはメアリーの弟がいる。 (= (9))

(20)においても、主語ジョンの内在的な特性として、弟という名詞が用いられているわけではない。例えば、ジョンにとってメアリーの弟は心強い存在であるというように、文脈によって、主語と目的語との関係が決定される解釈となる。

以上のことから、所持解釈が得られる場合には、目的語に譲渡可能所有、不可能所有のそれぞれを表わす名詞が用いられる場合が含まれる。

### 3.3 構文の解釈にもとづく定性効果

以上の二つの解釈を踏まえると、これらの構文の定性効果が適切に説明できる。

(21) John has a sister (of his own).

(22) Q. What will you give to Eliza for her birthday?

A. Eliza has a mirror, so I won't give one to her. (= (5))

(cf. Tham (2006: 139))

(21), (22A)は、haveの目的語にそれぞれ譲渡不可能所有、可能所有を表わす名詞が用いられ、主語の内在的な特性を表わす。たとえば、(22)では、「Elizaの誕生日に何をあげようか」と聞かれ、(22A)で、「彼女は鏡を既に持っているから、鏡はやめておこう」と返答している。つまり、ここではElizaの所有物に関しての解釈しかできない状況になり、所有解釈が得られる。この場合、(21), (22A)ともに目的語名詞句は不定である。この文脈で、(23), (24)のように目的語が定名詞句となると容認されない。

(23) #John has the sister of his own.

(24) Q. What will you give to Eliza for her birthday?

A. Eliza has #the mirror, so I won't give one to her.



同様の説明は日本語の所有構文にも当てはまる。

(25) 太郎には{たくさんの/2人の/何人かの}兄弟が{ある/いる}。

(26) 彼女には{たくさんの/いくらかの}お金がある。

(25), (26)は、ともに主語の内在的な特性が表わされ、所有解釈が得られる。この場合、(27), (28)のように、目的語に、定冠詞を含む強決定詞(strong determiner)が用いられると容認されない。

(27)\* 太郎には{その/ほとんどの/全ての/彼の}兄弟が{ある/いる}。

(28)\* 彼女には{その/あらゆる/ほとんどの/全ての/彼女の}お金がある。

したがって、所有解釈が得られる場合は、目的語の名詞句に定性効果が生じる。この場合、目的語に譲渡可能所有、不可能所有のどちらの名詞が用いられていても、所有解釈が得られる場合は、一様に定性効果が生じる。

次に、所持解釈の場合をみてみよう。

(29) Q. What can I use to hold these papers down?

A. Eliza has a mirror. (= (15))

(A'. # Eliza {owns/possesses} a mirror.)

(30) Paul: I have a brother of Jack's as secretary.

Kim: Oh, that's funny! Anne has a sister. (= (17))

(Jensen and Vikner (1996: 8))

(29), (30)におけるhaveの目的語には、それぞれ譲渡可能所有、不可能所有を表わす名詞が用いられ、ともに所持解釈が得られる。この場合、不定冠詞と共起可能である。さらに、所持解釈が得られる状況では、(31), (32)のように、目的語が定名詞句であっても問題はない。

(31) Q. What can I use to hold these papers down?

A. Eliza has {a/ the/ John's} mirror. (= (15))

(32) A. I have a brother of Jack's as secretary.

B. Oh, that's funny! Anne has {a sister/Bill's sister}. (= (17))

同様のことは、日本語にも当てはまる。

(33) ジョンにはメアリーの弟がいる。 (= (9))

(34) ジョンにはあの本がある。 (= (8))

(33), (34)は、目的語に、それぞれ譲渡不可能所有、可能所有の名詞が用いられ、ともに所持解釈が得られる。この場合、問題なく定名詞句として表現することが可能である。

よって、所持解釈が得られる場合は、目的語の名詞句には定性効果が現れない。この場合、名詞句に譲渡可能所有、不可能所有のどちらの名詞が用いられていたとしても、この解釈が得られる環境では、一様に定性効果がみられない。

以上のことから、定性効果が生じるか否かは、目的語名詞が譲渡不可能な所有関係を表わすということだけでは適切に説明できないといえる。この現象を説明するためには、構文自体がどのような文脈で用いられ、全体の解釈として、所有解釈・所持解釈のどちらが得られるかという視点が必要となる。

ここで、次のような例をみてみよう。

(35) Now who has that book? (Costa (1974: 11))

(36) Did you say you have bought *Your Timble and You*?

I have that book too.

(Costa (1974: 7))

(35), (36)の所有構文は、本論で主張する所有解釈が得られる例である。それにもかかわらず、目的語は定名詞句である。つまり、一見すると、本論の主張とは相容れない事実だと思われる。しかしながら、これらの例を反例とは考えない。Costa (1974)によれば、(35), (36)のthat bookは、形の上では定表現であるが、意味的にはその問題としている本のtypeを表わし、特定のtokenを表わしているわけではなく、意味的には不定扱いとなる。つまり、that bookは、(37)のように、a book of that type being discussedのように言い換えることが可能である。

(37) *that book* = a book of that type being discussed

(cf. Costa (1974), Bolinger (1977), Hawkins (1978), Lumsden (1988), Prince (1992), Tham (2005))

このように、「定冠詞と用いられた名詞の中には、全体としては不定名詞句のように解釈される名詞もある」という主張は、Bolinger (1977)など、いくつかの研究でも指摘されている。「本」などの無生物のモノは、有性物とは違い、複数のコピーを簡単に作ることができる。そのため、that bookと表現して、tokenとしての「本」ではなく、typeとしての「本」を問題にすることが容易に可能となる。よって、こうした解釈を許すと考えられる。

いずれにしても、定性効果を適切に説明するには、当該構文の解釈が、所有解釈、所持解釈のいずれであるのかという点を考慮する必要がある。

#### 4. 名詞句の意味機能と構文の関係

本節では、日本語のコピュラ文、存在文、所有文の詳細な分析をおこなっている西山(2003, 2009, 2013)を概観する。

##### 4.1 措定文と指定文

西山は、日本語の「AはBだ」という形式を持つコピュラ文をいくつかに分類している。まず、(38)は、措定文と呼ばれる文である。この文は、主語名詞句の「あの男」という指示対象について「画家」という属性を帰す文である。この場合、「あの男」は、指示的名詞句であり、「画家」は、属性を表わす機能を有しており、叙述名詞句とされる。

(38) 措定文 (predicational sentence)

あの男は 画家だ。

指示的名詞句      叙述名詞句

「AはBだ」の形式を有する文には、(39)のような倒置指定文もある。(39)は、「犯人はどの人かと言えば、あの男がそうだ」という意味である。この場合、主語名詞句の「犯人」は、個体を指示するのではなく、[xが犯人である]という命題関数を表わす。こうした命題関数を表わす名詞句のことを、西山は変項名詞句と呼ぶ。したがって、この文は、[xが犯人である]という命題関数の変項の値を、「あの男」の指示対象で指定している(specify)文となる。倒置指定文には、その

背後に(40)のような疑問文が隠れている。そして、倒置指定文は、その疑問文の答えになるような関係にある。

(39) 倒置指定文 (specificational sentence)

犯人は	あの男だ。
変項名詞句	指示的名詞句/値
[ x が犯人である ]	あの男
↑	└──────────┘

(40) 犯人は誰であるか。

(41) 倒置指定文「AはBだ」(specificational sentences)

- a. A : [ …x… ] という変項を含む非指示的名詞句 (「変項名詞句」)
- b. B : 変項xを埋める値

ここで、変項名詞句が非指示的であるという点を確認しておこう。(42)のような文脈において、花子の発言における「話している人」という名詞は、具体的に誰かを指示しているのではない。この場合、「話している人」という名詞は変項名詞句となっている。つまり、花子は、変項を埋める値について質問しているのである。そもそも、壇上にいる三人のうちのいずれかを指示しておきながら、それはどの人かという質問は不自然である。また、太郎の発言においても、「話している人」という名詞句には指示対象はない。このように変項名詞句は命題関数を表わし、個体を指示する働きはない。

(42) (三人の腹話術師A, B, Cが壇上におり、そのうちの一人が話をしている場面において、聴衆である花子と次郎の会話)

花子：話している人はどの人かしら。

太郎：話している人はBではないだろう。

(西山(2009: 83))

## 4.2 存在文

次に、西山(2003)の存在文の分析を確認しよう。西山は、場所表現を伴うかどうかで、存在文を大きく二つに分ける。

- (43) a. 場所辞を伴う存在文 (場所存在文)
- b. 場所辞を伴わない存在文 (絶対存在文)

まず、(44)のように、場所辞を伴う場所存在文は、ある空間的場所に個体が位置しているという意味になる。この場合、存在主体の「バナナ」や「母」は、指示的名詞句となる。

- (44) a. 机の上にバナナがある。
- b. 隣の部屋に母がいる。

- (45) 場所存在文「Lに、Aがある/いる」
- a. 空間的場所Lに、個体Aが位置している/位置していない
- b. L: 場所辞 (場所を指示する指示的名詞句)
- c. A: 存在主体 (個体を指示する指示的名詞句)

西山は、存在文には、場所存在文とは異質な存在文が多くあることに注意すべきだとして、(46a)のような、場所辞を伴わないような絶対存在文を挙げている。(46a)は、波線部分の名詞句「この問題を解くことのできる人間」の対象となる人(例えば、「太郎」であれば「太郎」)が、ある特定の場所にいないという意味ではない。そのため、(46a)の文に対して、(46b)のように、「その人は男性ですか」や「その人は背が高いですか」などの質問をすることはできない。また、(46a)の文は、(46c)のような存在文以外で言い換えることが可能である。つまり、絶対存在文は、場所とは無関係の文だといえる。絶対存在文における存在主体(波線部分の名詞句)は、(46d)のように、[xがこの問題を解くことができる人間である]という命題関数を表わす変項名詞句であり、絶対存在文全体としては、その変項の値の有無を述べている。

- (46) 絶対存在文
- a. この問題を解くことができる人間はいない。 (西山 (2013: 254))
- b. 「この問題を解くことができる人間」について、「その人は男性ですか」「その人は背が高いですか」などと問うことはできない
- c. 非存在文で言い替え可能: 「誰もこの問題を解くことができない。」

d. 存在主体は変項名詞句：[xがこの問題を解くことができる人間である]

e. 変項の値の有無を述べるタイプの存在文

(47) 絶対存在文「Aがある/いる」

a. A：命題関数  $F(x)$  を表わす変項名詞句

b. 命題関数  $F(x)$  を充足する値の有無や多少を述べる文

(西山 (2013: 257))

さて、(48)をみてみよう。(48)は場所存在文と絶対存在文とで曖昧である。

(48) あの大学にノーベル賞受賞者がいる。

(西山(2013: 263))

まず、(48)を場所存在文と解釈すると、「あの大学に、講演か何かでノーベル賞受賞者がたまたま来ている」という意味となる。この場合、「あの大学」は場所表現になっており、「ノーベル賞受賞者」という名詞句は指示的名詞句である。一方、この文を絶対存在文と解釈すれば、「あの大学のスタッフにノーベル賞受賞者がいる」という解釈となる。つまり、「あの大学」という名詞句は、場所表現ではなく、「あの大学のスタッフの中に」というような解釈となる。また、「ノーベル賞受賞者」という名詞句は変項名詞句である。つまり、[xがノーベル賞受賞者である]という変項xの値があ大学のスタッフの中にいるという意味となる。場所存在文の場合とは異なり、絶対存在文の解釈では、このノーベル賞受賞者は、文の発話時点でこの大学のキャンパス内にいる必要はない。

次に、定性効果との関連で(49)を見てみよう。「3人、たくさん」などの弱い数量詞(weak determiner)が現れた場合、(49a)は、場所存在文とも読めれば、絶対存在文とも読める。しかしながら、(49b)のように、「大部分、すべて」のような強い数量詞の場合は、絶対存在文とは解釈できない。つまり、強い数量詞が共起できるのは、場所存在文とであり、絶対存在文とではない(西山(2009: 70))。

(49) a. 試験を受けなかった学生が{3人/たくさん}いる。

b. 試験を受けなかった学生が{大部分/すべて}いる。

絶対存在文に定性効果がある理由について、西山は、強い数量詞の持つ機能と絶

対存在文にある変項名詞句の性質とが相容れないためだと説明する。絶対存在文においては、「試験を受けなかった学生」という名詞は変項名詞句であり、文の意味は変項を埋める値の有無や、値の個数を問題にする。その意味において、個数を数えあげるタイプの弱い数量詞と共起するのは自然である。しかし、「すべて/大部分」といった強い数量詞は、与えられた母集合の中での割合を求める数量詞であり、その母集合となる名詞句が指示的であることを要求する。そのため、非指示的な変項名詞句は、その母集合とはなりえずに、強い数量詞と絶対存在文とが相容れないことになる。

#### 4.3. 所有文

次に、西山(2009, 2013)の所有文に関する分析を概観する。まず、所有文は、場所存在文と同じ「AにBがある/いる」という形式をとるが、両者は本質的に異なる。例えば、(50)は、場所存在文と所有文とで曖昧である。

(50) フランスには、国王がいる。

- a. 場所存在文：「フランスという地理空間にある国(たとえば、モナコ)の国王が所在する」

「フランス」＝地理空間を表わす場所辞

- b. 所有文：「フランスは君主制だ」

「フランス」＝「フランス国家」(所有者)

「国王」＝「フランス国王」しか表さない。

(西山(2009: 9), 西山(2013: 286-287))

まず、場所存在文と解釈するのであれば、「フランス」という名詞は、地理的な空間を表わす場所表現となる。そして、文の意味は「フランスという地理空間に、ある国(たとえば、モナコ)の国王が所在する」となる。

一方、この文を所有文と考えると、「フランス」という名詞は、フランスの国家を表わし、所有者の解釈となる。そして、「国王」は「フランス国王」という解釈しか許されない。つまり、所有文の意味は、「フランスは君主制だ」となる。さらに、所有文は、絶対存在文と密接に関わるとする。例えば、(51a)の所有文は、

(51b)のような絶対存在文と関わる。

(51) a. 花子(に)は、夫がある/いる。【所有文】

「夫」：変項名詞句の主要部。指示的名詞句ではない。

b. 花子の夫が存在する。【絶対存在文】

変項名詞句

c. ≪[xが花子の夫である]を満たすxの値が空でない≫

(西山(2013: 287))

(51b)の絶対存在文の波線部分は変項名詞句であり、(51c)のような≪[xが花子の夫である]を満たすxの値が空でない≫という意味を表わす。つまり、「花子が結婚している」という所有文と近い意味をもつ。このことから、西山は、(51a)の所有文における「夫」という名詞も変項名詞句の主要部だと考える。仮に「夫」という名詞を指示的名詞句とするならば、「夫」を「太郎」などの具体的な名前 で置き替えたような、(52)の文も所有文と解釈できるはずである。しかしながら、(52)は非文になるか、所有文以外の意味をもつ。したがって、所有文における「夫」は指示的名詞句ではなく変項名詞句とされる。

(52) a. \*花子(に)は、太郎がある。(指示的名詞「太郎」の場合は、所有文と解釈できない)

b. 花子(に)は、太郎がいる。(所有文以外の解釈となればok)

(西山(2013: 287))

所有文と絶対存在文とに密接な関係がある別の例としては、両構文に定性効果が生じる点が挙げられる。(53)から分かるように、絶対存在文同様に、所有文も強い数量詞と共起しない。

(53) a. このコース(に)は、必読書が{3冊/たくさん/\*大部分/\*すべて/\*半分}ある。

b. 花子(に)は、子供が{3人/たくさん/\*大部分/\*すべて/\*半分}いる。

c. この試験(に)は、合格者が{8人いる/ほとんどいない/\*大部分いる/\*すべている/\*半分いる}。



d. 豊臣家は{たくさんの/\*大部分の}敵がいる。

(西山(2013: 288))

西山は、所有文の「A(に)はBがある/いる」におけるAとBの関係を次の①～③の三種類に分ける(西山(2009: 11-12), 西山(2013: 288-291))。<sup>3</sup> その際に、絶対存在文「AのBがある」における「AのB」を手掛かりにして分類している。そして、この分類に基づいて所有文の意味構造を提案する。ここで注目すべきは、①～③におけるAとBとの関係に共通するのは、Bの名詞において変項が介在する点である。つまり、西山は、所有文には、何らかの形でBに変項が関わると考える。

まず、一つ目の関係が、①のパラメータと非飽和名詞の関係である。(54a)において、波線部分のBに相当する名詞は、非飽和名詞と呼ばれる名詞である。非飽和名詞とは、パラメータを含み、そのパラメータの値が決まらない限り、それ自体では外延を決定できないような名詞を指す。例えば、「夫」という名詞は、「 $\alpha$ の夫」という $\alpha$ の値が決まらなければ、その人が夫であることを決めることはできず、「花子の夫」となってはじめて完全な名詞となる。

① パラメータと非飽和名詞(unsaturated noun)の関係

(54) 絶対存在文「AのBがある」における「AのB」

a. ex. 花子の夫/このコースの必読書/あの試験の合格者/豊臣家の敵/フランスの国王

b. B: 非飽和名詞 (unsaturated noun): パラメータを含み、パラメータの値が具体的に定まらない限り、それ単独では外延(extension)を決定できず、意味的に充足していない名詞。

二つ目が、(55)にあるような「部屋」と「窓」との関係である。「窓」は、非飽和名詞とは異なり、飽和名詞である。あるものが窓であるかどうかは、部屋とは関係なく決めることが可能であり、その意味で飽和された名詞である。しかし、「窓」は「部屋」を構成する一部であり、どの部屋にも属さない窓などはありえない。つまり、「その部屋」と「窓」とは、譲渡不可能な関係となり、「 $\alpha_1$ の窓」

という変項を含むものとして理解される。

② 基体表現と譲渡不可能名詞の関係

- (55) a. その部屋(に)は窓がない。【所有文】  
b. その部屋の窓が存在しない。【絶対存在文】  
c. 「窓」：飽和名詞 (saturated noun)：単独で外延を決定できる  
d. 「窓」は「部屋」を構成する部分であり、どの部屋の窓でもない窓そのものなどはありません⇒「その部屋」と「窓」は譲渡不可能な関係にある⇒「 $\alpha_i$ の窓」

三つ目の関係は、(56a)のような文に見られる関係である。(56a)の所有文は、(56b)の絶対存在文に近い意味をもつ。絶対存在文における「田中先生の本」という名詞句は、(56c)のように、文脈によってさまざまな解釈が可能である。例えば、《田中先生が所有している本》、《田中先生が執筆した本》などの解釈が可能である。つまり、「田中先生の本」は、《田中先生と関係Rを有する本》と解釈することができる。すなわち、「 $\alpha_i$ の本」とは、[xが $\alpha_i$ と関係Rを有する本である]という意味をもち、ここにも変項 $\alpha$ が介在する。

③ AとBとのあいだの語用論的關係R

- (56) a. 田中先生(に)は本がたくさんある。【所有文】  
b. 田中先生の本がたくさん存在する。【絶対存在文】  
c. 「田中先生の本」：《田中先生が所有している本》、《田中先生が執筆した本》、《田中先生について書かれている本》、《田中先生が書評を書くことになっている本》など

西山は、所有文におけるAとBの関係に基づいて、所有文の意味構造を次のように提案する。すなわち、所有文とは、その述語の部分に絶対存在文を内在し、その絶対存在文が主語の属性となり、全体として主語を叙述する措定文となるような二重構造を成すと考える。

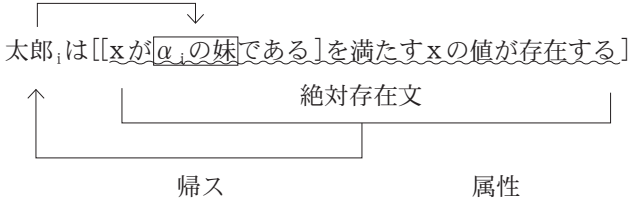
- (57) a. 太郎の妹がいる。【絶対存在文】  
b. [xが太郎の妹である]を満たすxの値が存在する

(58) a. 太郎は妹がいる。【所有文】

b. 「太郎は妹がいる」の意味構造

(西山(2013: 292))

束縛スル



(58a)の所有文の意味構造は、(58b)のように考える。「妹」は非飽和名詞であり、パラメータとして変項 $\alpha$ をとる。また、「 $\alpha_1$ の妹」は「 $x$ が $\alpha_1$ の妹である」という命題関数を表わす変項名詞句であり、(58b)の意味構造における波線部分は、絶対存在文となる。そして、この絶対存在文が、主語の「太郎」に対する叙述をおこなう属性を表わす。

ここで気を付けるべき点は、非飽和名詞「妹」の変項 $\alpha$ が、主語の「太郎」によって束縛される関係にある点である。西山は、「妹」のパラメータが、意味論レベルで主語によって束縛される変項と解釈すべきだとしている。つまり、どのような文脈が与えられたとしても、(58a)の所有文は、(59a)のような「太郎」以外の妹がいるという解釈にはならない。また、(59b)のように、直接「太郎」を妹のパラメータに入れるような解釈もできない。

(59) a. 《太郎は[次郎の妹]が存在する》

b. 《太郎は[太郎の妹]が存在する》

(西山(2013: 293))

このように、西山は、所有文における非飽和名詞のパラメータを束縛変項とみなす。この分析は、(60)のようなwh疑問の際にも束縛変項を介在させる必要があることから正当化されるとしている。

(60) a. 誰が妹がいるの。

b. 《誰<sub>i</sub>が[[ $\alpha_i$ の妹]がいる]の》

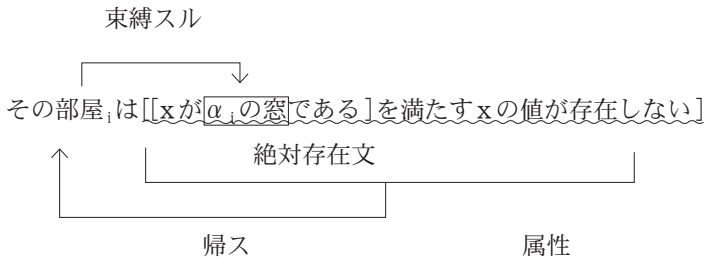
(西山(2013: 293))

(60a)の所有文において、「妹」のパラメータとして主語の「誰」を入れることは

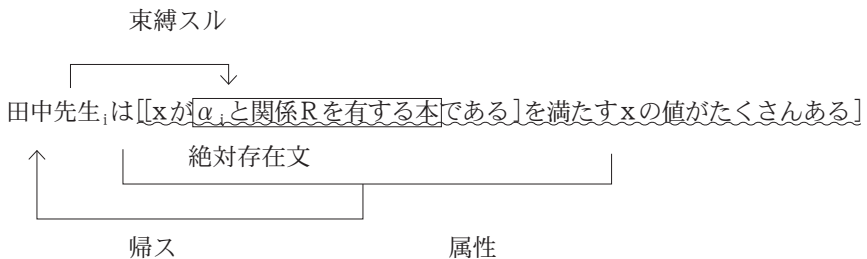
できず、束縛変項  $\alpha$  を介在する必要がある。

所有文を絶対存在文が埋め込まれた措定文とする分析は、他の二種類の所有文(61)や(62)にも当てはまる。これらの所有文に共通しているのは、絶対存在文を内在し、全体として措定文の格好をした二重構造を成す点である。さらに、いずれの意味構造にも、主語に束縛された変項が関与する。

(61) 「その部屋は窓がない」の意味構造 (西山(2013: 294))



(62) 「田中先生は本がたくさんある」の意味構造 (西山(2013: 295))



以上の点を踏まえて、西山は、(63)のように、所有文の成立条件を二つ挙げている。一つ目は、「A(に)はBがいる/ある」において、「Bがいる/ある」の部分が絶対存在文であり、Bが変項名詞句であるという条件である。そして、この条件が原因で、所有文に定性効果があるとする。もう一つの条件は、主語Aによって束縛される変項がBのどこかに付随する必要があることである。

(63) 所有文「A(に)はBがいる/ある」が成立するための二つの条件

(西山 (2013: 297))

( i ) 「Bがいる/ある」の部分が絶対存在文の意味構造を有していなければ

ならない。とくに、Bが変項名詞句としての条件を満たしていなければならない。（⇒定性効果の原因）

- (ii) Aの指示対象に「Bがいる/ある」で表される属性を帰すための条件が満たされていなければならない。そのためには、Aによって束縛されている変項がBのどこかに(目に見えない形で)不随している必要がある。

#### 4.4. 所有文とリスト存在文との違い

(63)のように所有文を規定すれば、一見所有文に見えるような(64b)は、リスト存在文という別の文として理解される。

- (64) a. 妻：わたしたちが旅行中、お祖父さんをほっといて大丈夫かしら？  
 b. 夫：大丈夫だよ。お祖父さんには花子がいるから。  
 c. ≪[xが祖父の世話役である]を満たすxの値として花子がいる≫

(西山(2013: 304))

(64a, b)の対話において、(64b)の下線部の文は、(64c)のような≪[xが祖父の世話役である]を満たすxの値として花子がいる≫という意味を表わす。西山によると、(64b)の下線部の文は、所有文ではなく、リスト存在文である。なお、この場合、変更名詞句である[xが祖父の世話役である]という部分は、語用論的に復元される(西山(2003: 415))。

ここで注意しなければならないのが、仮に、「花子」が「お祖父さんの孫」だったとしても、(64b)の下線部の文は、「お祖父さんに花子という孫がいる」という血縁関係を表わす所有文とはならない点である。この文において、Bに相当する「花子」は、それ単独で通常個体を指示する指示的名詞句であり、変項を含む名詞とは考えられない。そのため、(63)の成立条件にあてはまらずに、所有文として成立しない。

所有文とリスト存在文とでは、変項がどのように介在するかで異なる。(64c)から分かるように、(64b)のリスト存在文にも、確かに変項は介在する。しかし、リスト存在文におけるBの名詞は、その変項を埋める具体的な値である。つま

り、Bの名詞は、「花子」という指示的名詞句であり、変項名詞句ではない。一方、所有文におけるBは、指示的名詞句ではなく変項名詞句である。そして、その変項は主語によって束縛される関係にある。つまり、所有文とリスト存在文には、ともに変項は介在するものの、Bの位置に変項の具体的な値がくるか、変項名詞句がくるかで異なる。

こうしたリスト存在文は、英語のthere構文にもみられる。通常、there構文には定性効果があるが、ある文脈のもとではその効果がみられない。

(65) a. John: What can I use to prop open the door?

b. Mary: There is the book on the table.

(cf. Abbott (1993: 44), 西山(2013 : 303))

c. <ドアを支えて開けた状態にしておくのに、使えるものとしてテーブルの本がある>

d. <[xがドアを支えて開けた状態にしておくものである]を満たすxの値として、テーブルの本が存在する>

(65b)の文は、(65c)のように、ドアを支えておくために使えるものとして、テーブルの本があるという意味である。この場合、(65b)のthe book on the tableが、変項名詞句の値として現れている。

また、リスト存在文には、be動詞に後続する名詞句が定名詞句だけでなく、(66)の下線部の文のように、不定名詞句の場合も含まれる。

(66) Lee Anne might have preferred that Akiko simply accept her explanation, but in fact there is also an issue related to money which contributed to Lee Anne's reaction. (熊本(2005: 12))

この点について、熊本(2005)は、リスト存在文の特徴は定名詞句が現れるということではないとする。つまり、名詞句の定性だけに注目しては不十分であり、その名詞句が文内においてどのような意味機能を果たすかという視点が必要となるとする。すなわち、名詞句が変項名詞句なのか、指示的名詞句なのかという違いを捉えることこそが、それぞれの構文の本質に迫る上で重要だとする。

## 5. 西山(2003, 2013)の分析との関連

本節では、西山(2003, 2009, 2013)の日本語の分析を踏まえて、本論の主張との関係を見ていく。

まず、3節で提案した所有解釈とは、西山の分析における所有文で得られる解釈に対応するといえる。つまり、所有解釈とは、「主語が目的語の変項を束縛する場合にのみ得られる解釈である」と再定義することができる。所有解釈を得る場合には、haveの目的語に(67a)のようなsisterなどの非飽和名詞が現れる場合もあれば、(67b)におけるようなcarなどの飽和名詞が現れる場合も含まれる。いずれの目的語名詞にも、主語に束縛される変項(束縛変項)が存在する。つまり、所有解釈が得られる場合の目的語名詞句は、変項名詞句になっているといえる。sisterなどの非飽和名詞は、 $\alpha$ 's sisterという変項を含み、carなどの飽和名詞は、 $\alpha$ 's carのように変項を要求する解釈となる。そして、変項名詞であることから、非指示的となる。

(67) a. John has a sister (of his own). (= (21))

b. Eliza has a car. (= (13a))

一方、所持解釈が得られる文は、西山のリスト存在文に相当すると考えられる。すなわち、所持解釈とは、「目的語名詞が飽和的に解釈される場合にのみ得られる解釈である」と言い換えることができる。所持解釈を得る場合とは、(68A)のように、目的語にmirrorのような飽和名詞が用いられる場合もあれば、(69)のようなbrotherやsisterなどの非飽和名詞が現れる場合も含まれる。非飽和名詞は、その性質上、変項を含む名詞である。しかし、所持解釈を得る場合は、その変項が既に埋められた解釈となる。例えば、(69)のKimの発言におけるsisterは、 $\alpha$ 's sisterにおける変項 $\alpha$ が、先行文脈に登場するJackという値で既に埋まっている。つまり、所有解釈の場合とは異なり、この場合の $\alpha$ は、主語によって束縛される変項ではない(自由変項)。所持解釈を得る場合は、非飽和名詞が飽和的な解釈を得ているといえる。この点で、所持解釈を得た場合の目的語名詞句は、指示的名詞句となる。

(68) Q. What can I use to hold these papers down?

A. Eliza has a mirror.

(A'.# Eliza {owns/possesses} a mirror.) (= (15))

(69) Paul: I have a brother of Jack's as secretary.

Kim: Oh, that's funny! Anne has a sister. (= (17))

(67a)のsisterと(69)のKimの発言におけるsisterは、同じ非飽和名詞である。しかしながら、その意味機能は異なる。つまり、非飽和名詞sisterのとり変項 $\alpha$ が、主語によって束縛されるのか、既に文脈内で埋められているのかという違いがある。言い換えると、所有解釈と所持解釈とでは、その目的語名詞句の意味機能が異なる。所有解釈における目的語名詞は、変項名詞であるが、所持解釈が得られる場合は、指示的名詞である。したがって、その名詞句が変項名詞句であるか、指示的名詞句であるかは、目的語名詞句だけに着目しては分からないということになる。名詞句がどのような意味機能をもつかは、その当該の文の解釈を考慮する必要があるのである。

このように、所有解釈と所持解釈とでは、目的語名詞句の意味機能が異なる。そして、この違いは、目的語名詞句の指示性の差に対応する。西山は、日本語の絶対存在文や所有文の定性効果の原因を、強い数量詞の持つ機能が、変項名詞句の変項の値を数え上げるという要求にそぐわないためだとする。西山の分析対象は日本語であり、日本語には、英語のa, theに相当する冠詞がない。そのため、この説明では、英語の所有構文が所有解釈を得る場合に、なぜ定冠詞theを許さないのかを説明できない。そこで、西山の分析をあてはめて考えると、次のように説明することが可能と思われる。所有解釈が得られる場合、目的語名詞句は変項を含む変項名詞句である。指示性の観点から考えると、変項名詞は、非指示的である。一方、定冠詞は、指示性を要求する冠詞である。つまり、両者が指示性において相反する機能を有するため、所有解釈では定冠詞が許されないのだと考えられる。一方、所持解釈の場合では、目的語名詞句は指示的名詞句になるため、そのような制限がないといえる。つまり、英語の所有構文の定性効果についても、



目的語名詞句の意味機能が重要な要因となるといえる。

最後に、次の点を指摘しておこう。(70)の下線部の所有構文は、目的語名詞句が定表現でありながら、所有解釈を得る。3節において、*that book*は(71)のように理解され、形態的には定表現ではあるものの、意味的には不定扱いとなるとした。この説明が正しいとすれば、表面的には定表現であったとしても、意味的に不定であることが、目的語名詞句が変項名詞句になる上で重要であると考えられる。

(70) Did you say you have bought *Your Timble and You*?

I have that book too. ( = (36) )

(71) *that book* = a book of that type being discussed ( = (37) )

## 5. おわりに

本論では、英語の所有構文について、所有解釈と所持解釈という二つの解釈を提案し、その違いから定性効果を説明することを試みた。そして、西山の日本語の分析に基づいて考えると、本論の主張をどのように捉えなおすことができるかを考えた。所有解釈と所持解釈の違いは、目的語の名詞句の飽和性や指示性、また主語から束縛される変項があるかどうかという点から捉えなおすことが可能である。強調しておきたいのは、目的語に現れる名詞句だけに注目していても、それが指示的名詞句か変項名詞句かは決定できないという点である。名詞句がどのような意味機能を果たすかは、当該の構文の解釈を考慮する必要があるのである。

## 注

\* 本論の内容は、Kobukata (2009)および福岡言語学会2015年度第2回例会(於：福岡大学)において口頭発表した内容に加筆・修正したものである。なお、査読者2名の先生方から大変建設的なコメントをいただいた。ここに記して感謝の意を表したい。

1. Milsarkは、不定冠詞、定冠詞以外にも、*there*構文に現れることができるものと、そうではないものがあると指摘し、それぞれを弱決定詞(*weak determiner*)、強決定詞(*strong determiner*)

と呼んで区別している。

2. 本論では、関係名詞と譲渡不可能所有を表わす名詞とを同一視して議論を進めているが、両者を区別すべきとする議論もある(西川(2013))。この問題については、議論の余地があると思われるため、別稿に論じることとした。
3. 西山(2013)は、もう一つ別のタイプの所有文として、「太郎は、寝る前に飲むワインがある」のような文の分析もおこなっている。詳細な議論は、西山(2013)を参照されたい。

## 参考文献

- Abbott, Barbara (1992) “Definiteness, Existentials, and the ‘List’ Interpretation,” *Proceedings of SALT II*.
- Abbott, Barbara (1993) “A Pragmatic Account of the Definiteness Effect in Existential Sentences,” *Journal of Pragmatics* 19, 39–55.
- Bolinger, Dwight (1975) “On the Passive in English,” *The First LACUS Forum*, 57–80.
- Bolinger, Dwight (1977) *Meaning and Form*, Longman, London.
- Burton, Strang C. (1995) *Six Issues to Consider in Choosing a Husband: Possessive Relations in the Lexical Semantic Structure of Verbs*, Ph.D. dissertation, The State University of New Jersey.
- Costa, Rachel Mary Barritt (1976) *A Generative Semantic Study of the Verb HAVE*, Ph.D. dissertation, University of Michigan.
- de Jong, Franciska (1987) “The Compositional Nature of (In)definiteness,” *The Representation of (In)definiteness*, ed. by Eric Reuland and Alice ter Meulen, 270–285, MIT Press, Cambridge, Mass..
- Hannay, Michael (1985) *English Existentials in Functional Grammar*, Foris Publications, Dordrecht.
- Hawkins, John (1978) *Definiteness and Indefiniteness: A Study in Reference and Grammaticality Predication*, Croom Helm, London.
- Jensen, Per Anker and Carl Vikner (1996) “The Double Nature of the Verb *Have*,” *LAMBDA* 21, Institute for Datalogicvistik, Copenhagen Business School.
- Keenan, Edward L. (1987) “A Semantic Definition of “Indefinite NP”,” *The Representation of (In)definiteness*, ed. by Eric Reuland and Alice ter Meulen, 286–317, MIT Press, Cambridge, Mass..
- Kishimoto, Hideki (2000) “Locational Verbs, Agreement, and Object Shift in Japanese,” *The linguistic*

Review 17, 53–109.

岸本秀樹 (2005) 『統語構造と文法関係』, くろしお出版, 東京.

Kobukata, Yuko (2009) *A Semantic and Pragmatic Investigation of Possessive Constructions in English and Japanese*, Ph.D. dissertation, University of Tsukuba.

熊本千明 (2005) 「存在文と指定文の接点をめぐって」『九州英文学研究』6 (1), 111–127, 日本英文学会九州支部.

Lumsden, Michael (1988) *Existential Sentences: Their Structure and Meaning*, Croom Helm, London.

Milsark, Gary (1974) *Existential Sentences in English*, Ph.D. dissertation, MIT.

Milsark, Gary (1977) “Toward an Explanation of Certain Peculiarities of the Existential Construction in English,” *Linguistic Analysis* 3, 1–29.

Moltmann, Friederike (1995) *Intensionality*, ms, UCLA.

Muromatsu, Keiko (1996) “Two Types of Existentials: Evidence from Japanese,” *Lingua* 101, 245–269.

西川賢哉 (2013) 「[NP<sub>1</sub>のNP<sub>2</sub>] タイプF 譲渡不可能名詞NP<sub>2</sub>とその基体表現NP<sub>1</sub>」 西山佑司 編『名詞句の世界 その意味と解釈の神秘に迫る』65–82, ひつじ書房.

西山佑司 (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論—指示的名詞句と非指示的名詞句』ひつじ書房.

西山佑司 (2009) 「コピュラ文、存在文、所有文—名詞句解釈の観点から(上)(中)(下)」『月刊言語』38 (4), 78–86, 38 (5), 66–73, 38 (6), 8–16, 大修館書店.

西山佑司 (2013) 『名詞句の世界 その意味と解釈の神秘に迫る』ひつじ書房.

Partee, Barbara H. (1999) “Weak NP’s in HAVE Sentences,” *JFAK* [a Liber Amicorum for Johan van Benthem on the occasion of his 50th Birthday; CD-ROM], ed. by Jelle Gerbrandy, Maarten Marx, Maarten de Rijke and Yde Venema, University of Amsterdam, Amsterdam.

Prince, Ellen (1992) “The ZPG Letter: Subjects, Definiteness, and Information-Status,” *Discourse Description: Diverse Analyses of a Fund Raising Text*, ed. by William Mann and Sandra Thompson, 295–325, John Benjamins, Amsterdam.

Tham, Shiao Wei (2005) *Representing Possessive Predication: Semantic Dimensions and Pragmatic Bases*, Ph.D. dissertation, Stanford University.

Tham, Shiao Wei (2006) “The Definiteness Effect in English Have Sentences,” *Proceedings of Texas*

*Linguistic Society* 8, 137–149.